

令和4年度 奈良市立朱雀こども園 研究実践概要

園長名 鈴木優子

全園児数 217名

1. 研究主題

しなやかな心と体を育み、主体的に活動出来る子どもを目指して
～ “やってみたい” と思える環境と援助のあり方を探る～

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

現在の子ども達は運動機能が低下していることが指摘されている。本園においても体幹の弱さが見られ、椅子に座った時に姿勢の保持がしにくい、しゃがんで遊べない、よく転ぶなどの姿がある。また、興味をもった遊びには参加しようとするものの、遊びが続きにくい、受け身で消極的である、自信がないなどの姿も見られる。子ども達が “やってみたい” という気持ちをもって主体的に活動する為には、どのような環境や援助が必要かを探りたいと考え、研究主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもが主体的に活動できるようにそれぞれの年齢に合った環境構成や援助を行い、しなやかな心と体を育む。

②研究の重点

- ・ 0歳児から5歳児までのつながりのある保育ができるように定期的に会議をもち、職員間で各年齢の取り組みや子どもの様子、現状の課題を共有し合う。
- ・ 園内公開保育を行い、子どもの姿から保育を振り返って環境構成や援助のあり方を探って明日の保育に繋げていく。

③活動の方法 _____環境、_____保育者の援助

< 0歳児 >

【取り組み】

子ども達が家庭的な雰囲気の中で安心して過ごせるよう、特定の保育者が一人一人に応じた丁寧な援助を行う育児担当制保育を取り入れ、愛着関係を育んできた。『ちゅんちゅんこっことまれ』『おすわりやす』『こすれこすれ』などの遊びで、保育者とゆったりとした心地良いふれあいを楽しむ中で、だんだんと表情がほぐれ、歌に合わせて体を揺らしたり、身振り手振りで表現したりする姿がたくさん見られるようになった。また、子どもの表情や仕草などから思いを汲み取り、「楽しいね」と共感したり、「もう一回やってみる？」など言葉にして応えたりすることで、繰り返し楽しむ姿が見られるようになった。

【評価】

育児担当制保育により愛着関係を育んできたことで、安心して過ごせる空間をつくりながら、深い信頼関係を築くことができた。ふれあい遊びを通して、子ども自身が “やりたい” と思った時に保育者のひざに座りにきたり、「もういっかい」と人差し指を立てて要求し、繰り返し楽しんだりするなど、自分の思いを表情や仕草、喃語で伝えようとする姿にも繋がった。



< 1 歳児 >

【取り組み】

園庭やリズム室、保育室で日常的に運動遊びを取り入れていった。園庭では築山の上り下りに誘いかけ、『足指や足裏を踏ん張る』『バランスを取りながら歩く』という経験が十分にできるようにした。最初は四つばいで上ってお尻で滑り下りていた子どもも、保育者と一緒に手を繋いで歩く経験を重ねる中で、一人で歩いて上り下りできるようになった。一人で下りるのを怖がる子にも保育者が築山の下で呼びかけ、受け止めることで安心して一步踏み出し、できた喜びを味わうことができた。また、低月齢の子には緩やかな斜面を用意した。そこで上り下りを繰り返し楽しむ中で、自信をつけて築山にも上ろうとする姿が見られた。



【評価】

運動遊びを毎日意識的に取り入れる中で少しずつ体幹が鍛えられて、階段や築山の上り下りがスムーズになり、椅子に座る時の姿勢も良くなってきた。また、転ぶことも少なくなり、転んでも手をつくなどしてケガをしにくくなった。初めてする時には不安そうにする子もいたが、継続的に取り組むことで徐々に慣れて保育者と一緒に参加するようになり、保育者に見守られる中、一人でやってみようとする姿が見られた。1歳児が“やってみよう”と思っ

< 2 歳児 >

【取り組み】

保育室の中に運動遊びができる場所をつくり、箱積み木や牛乳パックの一本橋、室内トランポリンなどで、バランスをとりながら体を動かして遊ぶことができるようにした。最初は保育者が手を添えて箱積み木や一本橋を渡れるよう援助する中で、徐々に一人でも渡れるようになった。



繰り返し楽しむうちに、“もっと違うことがしてみたい”という意欲が出てきて、箱積み木の間を空け、ジャンプして渡る遊びに発展した。保育者も一緒にやってみたり、できたことを認めたりすることで、何度も“やってみよう”とする姿があった。一本橋やトランポリンの上に立った時、床に下りた時に、体がフラフラして座り込んでしまう子が多かったが、毎日遊びを楽しむ中で体を安定させられるようになった。また、友達がしていることを真似しながら一緒に楽しむ中で、友達とのかかわりが増えた。

【評価】

保育室の中に運動遊びの場所をつくったことで、友達がしていることがよく見え、興味をもって自分も“やってみよう”とする姿が見られた。子ども達の様子に応じて、用具の組み合わせを変えるなどして遊びに変化をもたせることで、毎日飽きることなく楽しむことができた。また、保育者が側で見守り、できたことを認めることが、“もっと見て欲しい” “もっとやってみよう”と思っ

< 3 歳児 >

【取り組み】

毎週火曜日、『楽しんで参加する』『保育者の話を聞いて取り組む』をねらいに、リズム室で体を動かして遊ぶ取り組み（サーキット遊びや体操など）を行ってきた。恥ずかしい、自信がないなどで参加が難しい子には、無理に参加を促すのではなく、子どもなりに頑張っている過程を認めるようにした。その中で少しずつ“やってみよう”と参加する姿が見られ、次第にみんながリズム室での遊びを楽しみにするようになった。秋頃からは遊びのリーダーを毎回替えたことで内容が多様になり、担任だけでなく色々な立場の保育者の話や指示を聞いて行動でき



るようになった。

運動参観のねらいを『子ども達がいきいきと楽しんで遊ぶ』にし、内容を慣れ親しんでいる遊びにしたことで、曲をかけると自然と集まり、喜んで遊ぶ姿が見られた。そして、「今日も踊りたい」「音楽かけて!」「リズム室で遊ぼう」などの声が日に日に増えていった。また、クラスごとに演技を見せ合い、お互いのいいところに気付けるような声掛けや援助を心掛け、刺激を受けられるようにしてきた。

【評価】

リズム室で体を動かす遊びに継続的に取り組み、頑張っている過程を認める声掛けをしていく中で、最初は参加が難しかった子も徐々に“やってみよう”と参加するようになった。そして、運動参観の内容を特別なものではなく、日々楽しんでいる運動遊びにしたことで、自信をもって参加することができた。また、友達を気に掛け、手を差し伸べたり誘いかけたりする姿も見られるようになっていった。

クラスの特徴や個々の得意・不得意があることを踏まえ、具体的な目標を立てて保育者間で話し合いを重ねてきたことで、一人一人が楽しんで取り組み、クラスや学年がまとまることに繋がった。

< 4 歳児 >

【取り組み】



毎週金曜日、リズムに合わせて体を動かす・止めることを意識できるような体づくり『力をつけよう』に取り組んだ。最初は座って見ている子が数人いたが、参加しにくいのは、「自信がない」「やり方が分からない」からではないかと考え、全員が楽しんでできることを目指して進めていった。

まず、見通しをもって安心して参加できるように、2クラスを4グループに分けて、同じ手順で行い、「何か1つはする」と目標を決めて参加するきっかけをつかった。普段過ごしている保育室でも行うようにし、友達の姿を見て拍手を送るなどお互いを認め合う仲間づくりを心掛け、“やってみよう”と思えるようにした。

次に、分かりやすい動きから始めたり、得意な子どもに見本になってもらったり、保育者が実際に触れてみせて足の親指の使い方を伝えたりしていく中で、徐々にやり方がわかってやるようになり、「できた」という達成感を味わうことができた。

【評価】

『力をつけよう』に参加しにくい理由を考え、一つ一つ対応していく中で少しずつ“やってみよう”とする姿が見られ、1学期の終わりには全員が喜んでするようになった。継続して取り組む中で姿勢を保てるようになり、保育者の話や食事に集中する力も少しずつ育ってきた。また、自信をもち、運動参観や生活発表会参観などの行事に意欲的に参加したり、自分の思いをみんなの前で発表したりするようになった。体の育ちが、自ら“やってみよう”と思っで色々なことに取り組む姿に繋がった。

< 5 歳児 >

【取り組み】

毎日朝の会の前や園庭からの入室の際にクラス全員で運動遊び（チャレンジタイム）に取り組んだ。自由遊びの中ではやろうとしない子もいる為、全員が経験できるように時間を設け、挑戦する姿を認めることで苦手な子も前向きに取り組めるようにした。

○室内(鉄棒・トランポリン・ペットボトルジャンプ・

体操棒・手押し車・力をつけようなど)

○園庭(太鼓橋・跳び箱・ジャングルジム・ケンケン・

かかと歩き・後ろ歩き・縄跳びなど)

用具をいつでも使用できるようにすることで、室内遊びの時に子ども達が自由に出して遊ぶようになった。チャレンジタイムで経験したことがきっかけとなり、鉄棒では前回りや逆上がりなど



できなかつたことに何度も諦めずに挑戦する姿が見られた。また、友達同士でやり方を教え合う

ことで、成功した時に喜びを共に感じていた。子ども達のやりとりを見守り、一人一人に合わせて援助することで、成功体験を増やして自信をもてるようにした。

また、帰りの会で取り組みを紹介し、友達と認め合える雰囲気を作った。その中で友達の遊びに興味をもち、自分も“やってみよう”と参加して自由にアイデアを出し合うようになった。トランポリンではどこに着地するかを話し合っ決めて、紙飛行機をつくってジャンプしながら目標に向けて飛ばしたりするなど、自ら遊びを考え、友達同士で話し合っ日々遊びを変化させながら楽しむ姿が見られた。

【評価】

普段の生活の中にチャレンジタイムを取り入れ、毎日継続することで、できないことに不安を感じて取り組みにくい子も少しずつ“やってみよう”とする姿に繋がった。また、クラス全体で友達を応援し、認め合う姿や、“自分もできるようになりたい”という意欲が見られるようになり、仲間と共に頑張ってみようとする気持ちが育っていった。そして、自信を積み重ねていく中で、自分達で遊びを考えるようになり、いろいろなアイデアを出し合いながら、協力して遊ぶことができた。

5. 研究の成果

- ・園全体で体幹を育む遊びに取り組み、定期的に会議をもって遊びの内容や子どもの様子を出し合ったことで、共通の課題に気づき、同じ方向を向いて保育を行うことができた。
- ・体幹を育む遊びに取り組み中で、子ども達が“やってみよう”と思っ活動するためには、『普段の遊びの中に取り入れ、継続的に取り組むこと』『信頼できる保育者の見守り』『子どもの姿を認める保育者の声掛け』『お互いを認め合えるクラスの雰囲気（幼児）』が必要であることがわかった。このような安心できる環境の中で子ども達は“やってみよう”と挑戦し、「できた」経験を重ねる中で自信をつけて新しいことや行事にも意欲的に参加するようになった。体の育ちは心の育ちに繋がると考えられる。
- ・園内公開保育では一つの遊びの動画を見ながら話し合った。テーマを絞ったことで、その時の子どもの思いや明日に繋がるための環境づくりや保育者の援助について、昨年度より掘り下げて話し合うことができた。

6. 今後の課題

- ・体幹を育む遊びをすることによって一定の成果は得られたが、まだ十分とは言い切れない。次年度も子どもの姿や発達過程を踏まえ、新しい活動を取り入れながら継続して取り組み、経験を積み重ねていきたい。
- ・乳児・幼児共に園庭の遊びの環境を考え、整えてきたが、学年を超えて話し合ったり共有したりすることが難しかった。また、遊びを深める為には、保育者自身が子どもと思いきり遊びこむ日をつくったり、遊びについて園全体で学ぶ機会をつくったりする必要もあると考えられる。次年度は子どもが“やってみよう”と思えるような、心と体を育てる遊びの環境を整え、援助していく為にはどのような方法があるかを考え、探っていきたい。